

1964年ひねくれものの EWC 生

青井 潔 中部工業大学名誉教授

司会・星野：それでは、2つ目の講演は中部大学の青井先生にお願いします。

青井：はい、それではまず上田先生には、この前の時、いきなりお近づきを頂きました。密かに「今日は何をやるか」と、どちらも「成り行きばったりで」と言っていました。どうも上田先生は約束を破った。うま過ぎる。

上田：何を思い付き、そんなもの。

青井：わたしは、ほんとにまともに書けと言われたら、うちに帰ってゆっくりしないと書けないなと思いました。

まず初めからいきなりこう言います。「青井、おまえは昭和の生まれか。」「はい。」「まだ日本は、こんな昭和の生まれが、助っ人に来てくれるようでは、日本ももう駄目だ、あかんよ。」昭和20年7月23日の夜。インドネシアのジャワ島のスラバヤという所があります。あそこからちょっと向こうへ、飛行機で40分ほど行った所に、マディオンという所があります。そこにわたしがおりました。こう言った先輩は、その夜ついに帰ってきませんでした。わたしどもの乗っていた飛行機は、6人乗りの一式陸攻、それから九六式陸攻です。わたしのような若は、旧式の九六式陸攻の操縦員でした。しかも終戦の年、わたしは高校3年の夏休みであった。そのくらい若い年でした。

でも先輩がどんどん、どんどん戦死していきますし、飛行機の補充が付かないものから、いわゆる青葉マークのわたしでも、主操縦員メインパイロットとして、夜間飛行やってバリクパパン攻撃に行っただけです。その1番機で行った蒲池という搭乗整備員、もちろんこれも飛行兵です。同じ整備員でも陸上でなくて飛行機に乗って、エンジンの調整や燃料タンクの切り替え、そういうこと一切をしてくれるから、われわれ操縦員は任せている。その後ろには腕のいい偵察員がいて、今でいったら、電探で何でも、あっちを向け、こっちを向け、地上のシミュレーションで、飛行機が飛び上がるような時代じゃないんです。われわれが飛行機を覚えたのは、家にいたときに足こぎの自転車しか乗ったことのない時代でした。坂道を上り終わったら、手を離してワーッとやるのがわたしらの喜びだった。これが三重の鈴鹿の飛行場で、昭和18年の6月、初めて飛行機に乗せられまして、これが飛行機かと目を回しました。緑色の草が、バーッと絨毯みたいになって、あー、あーと思ううちにグーッと後ろに返って、あーと言っているうちに、あ、今これからおれは空に上がるんだという感激を覚えたのが、16歳になる手前でした。日本の空を飛んだのは、3日間で45分です。あとは全部南方の地域ばかり飛んでいました。

今度アメリカへ行ったのは、何の喜びで行ったか。また行くのにわたしはだいぶかかって、36歳になっていました。懐かしいアメリカ人に会いに行くという気持ちなんです。先ほどお話があった、こんな厳しいアメリカではなかった、東西文化センターというのは。

お互いに殴り合って、決定的にこちらはやられた。その相手が懐かしいんです。それから留学生の中に、インドネシアの人もいます。それから前回のときに講演なさった、名前を忘れました。そら、あそこにずっと座っていますね。マレーシア人もいる、フィリピン人もいる、戦争中われわれは侵略者と言われ、どさくさの最後の時にはひどい目に遭わせているけど、わたしらは仲が良かったんです。ハワイに行ったらそういう人たちに会えるというので、上田先生の時のそういう危険というか際どいことは全然なくて、非常に気安く行ったんです。

しかもわたしは、おれは昔こうだったということは、一言も言わない。言うとは懐かしがって来るやつもいるかもしれない。

何せ 36 歳でした。というのは、30 になるまで、復学するのに、わたしはいろんな職業を経たんです。でっち小僧もやりましたし、印刷所の職工もやりました。それから英語は中学校の 3 年までであとは独学です。独学だけでも大学で単位を取る力は、何とかかんとかしてうまくやったんです。今のようなコンピュータがあったら、わたしは二重登録をやっていたかもしれない。とにかく出て、大学の卒業証書と免許をもらえば、文句はないだろう、マッカーサーの野郎がといったような気持ちでした。今は時効だからよろしいでしょう。放っておいたら、わたしはこんな所へ来られるような人間じゃなかったと思います。ただ向こうへ行って、「おれはこうだった」と言うと、「オー」と言って懐かしがってくれて、抱き締めてくれる者もいます。「昔おれは第二次大戦のベテランだった」と言えば、かつて日本へ来ていた者が、必ず手を差し伸べてくれます。憎むやつはおりません。これを言うと、一緒に留学した人たちの中で、わたしは特別扱いにされます。時には都合良く、時には敵を作るということで、一切黙って 1 年を過ごしてきました。まずそれが 1 つです。

今ここへ来ていらっしゃる珠久さんは非常に若くて、今もそうですけど、ものすごくかわいい学生さんでした。覚えていますか、わたしを。これから述べる方もみんなそうですけど、かわいい人ばかりの所へわたしが行きました。

わたしは、昭和 26 年やっとな中学校の教員になりました。ただ自分の同級生より 6 年遅れています。だから自分の 2 年、3 年先輩におけるのは、僕の下級生だったんです。それから入ったときにどういう芸をやったか。ほんとに中 3 の力ですけど、編入試験というのをやりました。1 年生から受けました。第一わたしは 6 人兄弟の長男です。「長男のおまえが働いてくれなければ、あとの 5 人の兄弟が文句を言う、膨れてしまう。おまえはもう学校へ行かないで、商売でも何でもやってくれ。」懐中電灯を持って、ベッドの中で英語の勉強をしていると、母親がそーっと開けて、「もう頼むから勉強をやめて、まともに働いてくれ」と、こう言われるんです。

その時わたしは岐阜市の東材木町の闇問屋の、繊維の親分のところに小僧に行っていました。今の高島屋が、まだ高島屋出張所と言われた、そこへ行ったりもしました。その行き帰りに何をやったか。商売は全然覚える気がなくて、英語ばかり読んでいました。英語も、中学校 3 年までをまともにやっていれば、何とでもなるというのがわたしの経験です。

編入試験を受ける前に、もうトーマス・ハーディーの短編なんかを読んでおりました。一遍読んで分らないから、何回でも繰り返して読んで、出勤の時に自分の家から駅まで4キロ歩くんです。道々それを読みながら、辞書をかばんの中に、汽車の中で分らなかったことを引いて、そしてあれの面白さ、良さというものを知りました。トーマス・ハーディーというのは、こんなに偉い人だったとは、全然知らない。読んだ作品によって、これはすごい人と中3の力で知ったんです、あのころ。

従って、編入試験で入りましたが、わたしは昭和2年生まれですけども、昭和6年、7年の者と同級生になった。

そうしたら、彼らの英語の力のなさに驚いた。おれは中学校3年までしか行っていない。あとは軍隊へ行ってたんだ。この時代の力は、まったく、わたしが先生と問答を繰り返していても、「青井さんが先生と何を話しているか分らない、何を聞いているか、わたしには分らない」と言う男女の籍に入ったんです。これは何の犠牲かという、戦争中の勤労働員です。鉄砲やタンクを作りには行ったけれども、休み時間にちょこちょこ授業をやって、ただ通っただけで、中学校の卒業証書、女学校の卒業証書だけは持っている。従って進学はできる。戦争中、英語は排斥されたと言いますが、少なくとも昭和17年度までの中学校3年生で、わたしの行った学校は、徹底的に教えてくれました。そしてこれが好きだったのが幸いしたと思います。

何だかんで、自分が入った学校で、入学式から卒業式までいたのは小学校だけです。あとは入学式にはいなかったが、卒業式にはいたというのが2つあります。最後には文化センターに行くわけです。何でもかんでも編入、編入で、少しでも金の要らないようにしなければならないという、信念でやってまいりました。そう言いながら大した力はありません。

ただこの受験の時に、ある非常に研究で有名な中学校でしたが、わたしは新卒で採用されて13年目になっていました。13年いて教生を指導したりしていると、だんだん有名になってくるんです。そこへ行くと、あいつはいろんな作品を読んでいる、新制大学の教生の間でわたしが知られるようになるわけなんです。それがだんだん県内に広がって行って、あいつは相当の小説や文学作品を読んでいる。わたしの考えでは、いい先生であっていいけれども、あした大学の先生になったら、あしたでも大学の教壇に立ってやれるという力をつけて、中学校の先生をやっていたい。そしてこの先生に習ったら1時間目から英語が好きで、好きでしょうがないという生徒を、作らなければいけないというような精神です。そしてただ彼らが隣の高等学校へ進学して、帰りに、「先生、遊びに寄った」「こういう宿題が出て、ちょっと見て」と言うときに、「おお、これはこうだ」と、答えられないような先生になりたくないという、その気持ちが非常に強かったんです。

受験をするということは、わたしどもの場合は、現場経験が3年それから年齢制限が40歳だったんです。そこで現場経験3年になったばかりで受ける人が、非常に大手を振ってやる、試験を受けるのに。これは試験をやったときには、必ず英語教育雑誌や公報にも載

っておりました、ここでこういう試験があると。だから英語の先生だったらみんな知っています。しかもアメリカ文化センターは、金曜日にしか試験をやってくれない。試験を受けに行こうと思うと、どうしても風邪を引いて休まなければいけない、ほんとに。

それからもう 1 つ大変なことがあった。どんな受験資格ができて、受ける資格ができたらずぐ受けなければ駄目だ。後になって、会社で受験するようになって、また後輩ができて、同期生がいて、2 年生、3 年生、係長候補、課長候補になって、一緒に TOEIC 受けようと言われたらつらいだろう、受けられない。それで自分は、TOEIC で滑ったら大変だ。自分はこんな点数だけでも、新任のあいつはおれより高かったといったら、立つ瀬があるか。

教員のわたしたちが、そういうふうにはずいぶん教生を鍛えておりました。だから試験を受けるときに受けられないわけです、そう言う。

1 次試験で滑って帰ってきたら、何が都合が悪いのか、駄目だったという通知をもらったら、翌日から生徒の顔がまともに見られません。「おれはおまえたちに黙っているけれども、実はおれは英語の試験に落ちたんだ」と言ったら、元気はないです。次は自分の家内、子どもです。うちの父ちゃんは日本一だと思ってくれるはずだが、おれは駄目だったとは言えない。それから近所隣の学校あるいは県内の先生方が、「あいつは大きな顔をしていたけど、教生の時におれをすごいたけれども、あれは駄目だったそうだと」言われる恐れが、英語教員のこういう空気の中にありました。他の人がどうだったか、わたしは聞きたいんです。だから 40 歳になってしまって、「何だ、あんなやつが行くならおれだって行けたのに」ということは言いたくない。だから絶対自信がなければ受けられないと、思って受けたのが 35 歳の時です。そしてこれは県教委も校長も何も知りません。内緒で受けて 2 次、3 次と行くわけです。2 次は面接でした。その時に噂が立っていた。というのは、推薦書が 3 通要るといふ、お願いに行かなければ。

時間があつたら後で述べますが、来月の 20 日に東京の日本記者クラブで、珠久さんもご存じでしょうが、酒井洋子さん、それから湊和夫さん、この 2 人に招かれています。酒井洋子さんは、おそらく珠久さんと同じくらいのお年だろうと思うんです。今、文学座の演出家、翻訳家で、日本文芸協会会員です。この前写真を送ってきましたが、さすがに美人です。ミナトさんは東大出の読売記者だったんです。わたしはあそこへ行ったとき、誰とも付き合った。珠久さんにも悪くは思われていないだろう。あまり近寄らなかつたから、悪くも思われていなかったらと思う。珠久さんは、清廉なきれいな人だと思って、わたしはいまだに忘れずに思う方です。あらゆる人、インドネシアの人でもマレーシアもフィリピンもタイも、それからアメリカ人ももちろん、それから一緒に行った若い人も、同期の人たちも、みんなあそこで仲良くやってきたと思う。

勉強は大変でありましたけれども、実は、わたしは 1 カ年に渡る日記を付けてきています。今日持ってきましたのは、12 月の 23 日から 1 月の 29 日までの日記で、だいたい 1 日分が A4 版の 1 枚半分になる。その中で（前略）、（中略）、（後略）と書いてありますのは、

わたしは生まれてから夢を見なかった晩は 2 晩しかない、自分が覚えている。あとは必ず夢を見ている。いい夢も悪い夢もとんでもない夢も見っていました。アメリカにいたときに、地球を半周して日本に帰ってきた夢を毎晩見ました。日本が出てこなかったのは 2 晩だけで、あとは日本の夢ばかり見ていました。その夢がしっかり書いてあるんです。目が覚めたら、まばたきするたびに夢を忘れてしまいますから、これはすごい夢だ、これはえらいものが出てくる。西部劇が出てくるときもある。あるいはまた嫌な捕虜収容所に入れられて、ひどい目に遭った、そういう思い出も、何でこんな所へまでも志願して来たんだろうという夢も見ます。面白がって、目がはっきりしないうちに書き込みました。これを（前略）としました。この書き直したものに、もうとにかく全部書いてある。これを今振り返ってみると、本当にやったことは、全部覚えがある。例えばセンターで何か行事があったときに、珠久さんとすれ違ったということも書いてありますけれども、夢だけは全然覚えがないですね。やっぱり忘れてしまう。だけど今読んでみると、あ、こんな夢を見たか。

（中略）と（後略）というのとは何か。買い物に行って金を使った話とか、映画を見に行ったとか、あるいは寮でみんなとだべった話で、あまり記録に残すに値しないものは（中略）としました。これはなぜそんなふうにしたか。その酒井洋子さんと湊さんがこれに気が付いて、これを 1 年間送ってくれと言い出したもので。夢の中で恋しい女房が出てきたなんていうことは書けないですよ。そういうのはみんな省略です。歯磨きの歯ブラシがすべて嫌だから、丁寧に紙に包んでゴミ箱に捨てたなんていう詰まらないことは書けません。それからフィルムを何本買ったとか、家から手紙が来た。どこからもあっちからも来た。日記の文と手紙の文と、それから有名になったんですけど、写真を撮ることで大変なものです。日記とそれから家庭や上司に送った手紙とは、ほぼ同量だと思います。例えば今日は 10 月 13 日だから、13 日のところの日記を取り出して読み始めますと、次の日の 14 日は何だった、15 日は何だったというように、つい徹夜してしまうんです。自分の書いたものは、一番いいものです。

ついでに申しますと、この話は飛びますよと言って、まだアメリカに着いていないんですから。

上田先生、いいですか。お約束どおり飛び回ります。15 歳 6 カ月から、昭和 22 年の 5 月 9 日に 19 歳 7 か月で日本へ帰ってきました。4 年 1 カ月です。戦争をやってから 2 年 1 カ月、あとは強制労働所です。センバワンという飛行場で。これはマレー沖海戦の時に、日本の九六式陸攻、一式陸攻が、イギリスのプリンス・オブ・ウェールズとレパルスを撃沈したときに、プリンス・オブ・ウェールズが助けを求めた先です、センバワンのバッファロー戦闘機に。彼らが押っ取り刀で飛び立ったときには、もう船は沈んでいて、こちら 3 機が落とされたけど、89 機ほどで攻めたてて日本の勝利だった。真珠湾の攻撃に続く大きな戦果だったんです。その 4 年 1 カ月の記録を、実は 5 年前に出版したんです。自衛隊からも、戦記作家からもいろんな所からくれと、それから湊さんと酒井さんの手に入ったんです。この 2 人が日記と手記のことをやかましく言い始めた。こういう日記を書くなどジ

ジャーナリストたる俺の仕事なのに、青井さんはよくもそんな時間があったもんだ。いや驚いた。ああなたの荒れ（著書）は読んだ。わたしは、こういうところ（暗夜のバシー開口）とこういうところ（バンダ海の偽装病院船事件）に感動したり驚いた。魚雷発射がどうだとか、高々度爆撃がどうだとか、夜間飛行がどうだとか、高等飛行の宙返りがどうだったのか。イロハから全部自分の記録として、いたる所まで行って、いよいよ自分がいなくなる前に、・・・これ、飛びますからね、・・・

生きて帰りました 23 日の夜。1 機だけ帰りませんでした。この晩は夜の 9 時半に出発で、5 分おきに出る。編隊で行ったら、あのころのわれわれは全機、撃ち落とされています。途中は高度 5,000 メートルで、酸素吸入器が要るんです。がたがた震いです。タマを落とすときは 7,000 メートルとなっています。それからあれは高度差を 500 メートルつけて飛ばないと、空中で衝突する。真っ暗な中です、灯火管制して。戦後アメリカに何遍も行って、アメリカの広さを知ったのは、その時いたセントルイスで、乗り換える飛行機が遅れて、夜中にギリギリ飛んだときに、何とアメリカは広いと思った。まあ、われわれも暗夜を飛んで帰るんです。

ちょっとアメリカに帰ります。ポツンと灯が見えて、あとは真っ暗です。ずーっと先の方へポツンと灯が見えた。その時はジェット機ですから、すごいスピードで、たぶん高度 4,000 メートルか 5,000 メートルで飛んできれいでした。刻々とこの灯が近付く。これは太平洋のど真ん中で、平和なときに、漁船があちこちで灯をともし漁をしていたら、それは分かるでしょう。戦争中、わたしたちはそんなものはないと覚悟していた。つまりジャワ海の何もないうところを夜間飛行やったんです。今では、よく落ちなかったと思います。あの広さとアメリカの広さは同じだと思いました。つまりだんだん近付いてきたのを、上からこうしてのぞいていると、その光の周りに、これは必ずガソリンスタンドなんです、サイミン屋というサイミンというのは食べ物。中国人の 2~3 軒の店がハート形に取り巻いている。高速道路がずーっとあって、20 分ぐらい飛ばないと、向こうの方に見える灯が、自分の腹の下に近付いてこない。これがアメリカの広さだと感心しました。わたしどもは、そういう夜の標識もないジャワ海路を飛んだんです、その腕で。

戦後それで時々、退職してから「先生、海外旅行をされますか」と言われる。おれにハンドルを握らせてくれるならな。人の操縦するような飛行機は危なくて乗れるかというのが、わたしの金がないことの言い訳です。子どものころに自転車に乗れるようになった子の後ろに乗せてもらおうと危なかった。こちらが乗れるから前の子がこう。あれと同じで、いくら 1 万時間、2 万時間乗った、われわれより何十倍も乗った人間よりも、俺がハンドルを握っていた方がほんとに楽です。わたしは今でもどんな飛行機でもよいから乗りたい。ジェット機は駄目です。乗ったことありません。どんな飛行機でもプロペラ機ならば、貸してもらって乗る。離着陸スピード、離着陸の機首角度、それからこういう乱暴な操作だけはできないとか、こんなものを読んで。あとは地上滑走を 10 分か 20 分させてもらおうと、もう飛行機の方から上げてくれ、上げてくれと請求してくるから、滑走路へ行くぞっと持

って行けばいいんです。アメリカへ行くまでそういうのは乗れなかった。だから羽田を出るときに19年ぶりに飛行機に乗るんだ、しかもジェット機に乗るんだ、あの感激は大きかったです。そろそろアメリカに近付くと思います。

まずわたしは何をやったか。カメラを手にして、窓際の席が欲しかった、なぜか。ハワイに着くときにその途中、6隻の航空母艦から飛び立った、1次、2次の360機の日本の攻撃隊が、雲の上にきれいな朝日が出るのを目の当たりにして、アメリカの放送の電波に乗って飛行機は飛んでいった。その跡を俺は行くんだ。ちょっとあとから進路修正しますが。とにかく夢中で窓際にしがみつきました。軍国主義者じゃありません。今思うと、とんでもない博打打ちの先祖を持ったと、わたしは思っています。とんでもないその先祖に、自分も入りかけた。なぜ自分が入ったかという、家が貧乏で、食うには一番安全だったからです。20歳になれば、あのころは必ずみんなは徴兵に取られる。20歳まで待っていて、行って3日でポンとやられる者もあれば、15歳で行っても生き残っている先輩がいくらでもおりました。それは、まあ、どっちにしてもおれたちは20歳か22、23で死ぬ人間だという覚悟をしていました。その歴史的写真が撮りたかったもんで、見事に撮りました。

元に戻ります。人間死ぬ前のいよいよ駄目だと思うときの、心境はどんなものかと思えます。今のわたしはもう年ですから、察していただけたと思います。座らせてくださいといつも思っています。あしたかもしれない、あさってかもしれない。でもわたしは家内を死なせて5年間、一人で全部やって暮らしています。

これは軍隊で鍛え上げられたおかげだと思います。どうしてもここへ来るときに足がつかずきます。ただし、わたしは操縦員でしたけれども、後ろに乗っている航法をやる偵察員は、必ず生きて帰れるように、帰りの道をきちっと覚えておいてくれる、昼間だったら。夜だったら星を測って戻ってくる。今のように機首の行く方に従って、ホイホイ帰れなかったんです。昼間だったら、初めて行くときは、島の特徴を見ていくんです。あそこに灯台があった、あそこに砂漠がある、あそこに野牛の群がおるといような島があったら全部覚えてきて、それを頼りにしかも風向を測って、風が右から吹いておる、風速6メートルでそのまま真っすぐ飛んだら、1秒間に6メートル風下にやられるんですから、着くはずの島に着くはずがありません。海へドボンですね。これを見事に修正して日本のパイロットは帰ってきたんです。わたしの先輩がわたしの航法をやってくれたんです。

ですからわたしは、ここへ来るときもその精神を忘れずに。子どもが夕べ電話して、「お父さん、あしたは大丈夫か」と。「大丈夫、大丈夫、放っておいてくれ。」電話をかけてきました。わたしは元気ですから、用事の時は来てほしいけど、いらなくなったら早く帰ってほしいんです。どういう所へでも出かける。わたしはこの間から、もう岐阜駅のトイレは中へ入らなければならない。外でもあるけれども遠い。中へ入ってもトイレは何番線にある。普通列車でも一番後ろにはトイレがある。ここへ来るときに、この駅の外へ出たところを、1番線の1番出口のすぐ向こう側にトイレがある。だからそこで用を済ませてくれれば粗相することはない。のどが渴いたら、飲む物はあそこにある。あの1番を上がってこう来れば、

ここの大学があるということを知って来ました。これは昔の飛行機に乗った者の心得だったと思うんです。

もう 1 つです。ちょっと先生も述べられましたけれども、わたしらの生徒の時は、ここは東亜同文書院と呼んでいました。そして今でいうと帝国大学の格があったんです。本当です。台湾には台北帝大というのがあった。京城には京城帝大というわけでありました。上海には、日本の領土ではないから、上海帝国大学なんていうのはできません。だから上海に東亜同文書院というのを作って、しかもあそこは学費がただでした。だからわたしも、もしも親が許してくれて、戦争へ行かなかつたら、あそこへ行こう。あそこへ行ったら、賛成してもらえる。戦争でこの同文書院の卒業生も、みんな学徒動員で取られていったんです。わたしらと一緒に戦った学徒動員は、しかもたくさんいて、わたしらは遅かったです。神宮外苑競技場で、雨の中をザック、ザック、ザックと鉄砲を担いで歩く、学徒たちの足元を見てください。いかに粗末な靴を履いていたか。いかに粗末な巻脚半を履いていたか。日本はあんな状態でアメリカと戦争をしたんだ。あのころには、鍋もお釜も釣鐘もみんな供出していました。それでアメリカと戦争をしていた。もうこの時、少年のわたしは軍隊にいましたけど、どんな戦争だったか分かります。

だからすごい相手だけでも、見事に打ち負かされた。そしてわたしのおじは 3 人戦死しました。パイロットで、わたしよりも 12 年も早かった海軍大尉、これとそれから潜水艦の海軍中尉、潜水艦伊-35 号。みんな 18 年の 11 月 11 日と 23 日に亡くなった。もう 1 人、国鉄の助役をやっていたおじも、フィリピンで、自決第 1 号で戦死しました。そういう家庭に育ったんです。

「とにかく同文書院というのは、すごい所でしたよ」と言って、下の玄関口の守衛さんに。「時間が早過ぎたんで、ちょっと待つので」と言うと、「ここで腰掛けてください」と守衛さんが言った。やっぱり黙っているのも愛嬌が悪いから、パンフレットがあるじゃないですか。「この学校はどういう学校か、あんたは知っていますか。」若い守衛さんは何も知らないです。パンフレットを見せてくれ、ここにこう書いてあると。僕は懐かしいからくださいともらってきました。これはすごい学校なんです。戦争とともに、誇るべき書物や宝物をほとんど中国に収めたんです。でも貴重な物を持って帰ってきているすごい大学なんです、愛知大学というのは。ここはもともと大変なところ。

飛ぶよ、わたしの話は。さて先生、時間が来たら教えてください、5 分前ぐらいに。まだアメリカへ着いていないです。

アメリカに着きまして、あらゆることをこの日記に書きました。授業も試験問題も、一人一人の先生の批評も、褒め言葉も書きました。やがて自分の同期の仲間の批判も書きました。珠久さんたちの純情な張り切った姿。湊さんや、酒井さんや児島正枝さんとか中村さんとか、すごい人たちがおりました。わたしらよりももう 10 幾つも年下の人なんですね。この人たちも全部書いてあります。そして何をやったかも書いてあります。あそこへ行って真珠湾を絶対見てくる。真珠湾メモリアルへ行ったのは、メモリアル設立 1 年後のこと

です。わたしのルームメイトのグラント・ハリソンというアメリカの社会科の先生、フランク・三品という 2 世、これのおかげで、わたしより 2~3 歳若い他の 7 人の先生たちは見向きもしないけど、わたしはカメラを提げて、真珠湾を全部写してきましたし、潜水艦も乗せてもらって帰ってきました。アメリカの潜水艦は、冷房が効いているのに感心しました。あらゆる所を見てきた。

ジョージタウンへ行きましたときには、やっぱりあそこで猛烈な勉強をやって、恥ずかしからん成績を取る。成績が悪かったら日本へ送還すると言われた。わたしは前頭相撲で、横綱、大関にならない。常に前さばきをうまくして、十両へ落ちない程度の成績を取ればいいんだという形で、日記に没頭しました。次にカメラです。

それからワシントンへ行きて、国立公文書館へ行きました。毎日曜日に通いました。なぜか。日本が終戦とともに、大本営も外務省も朝から晩まで、ボンボン、ボンボン物を焼いた。わたしたちのいた所でも。そらあの人はまだ生まれていないときに、わたしはあの人たちの頭の上をよく飛んでいたんです。ペナンの向かいのアエルワタルという基地です。その椰子林の中であれも燃やせ、これも燃やせ。戦争に負けた経験のない人間がいかにおろおろになるか。誰がこんなことを言い出した。「家族の写真があったら危ないぞ。特に飛行機乗りなら相手に憎まれている。真珠湾から、ヨーロッパでも憎まれているから皆殺しになるぞ。だから一切の物を焼け。」誰から出るのか偽まやかし命令。わたしの 2 年にわたる履歴の飛行記録というのがあります。何月何日何式の飛行機の何号で、何時間何分飛んでいる。教官は誰だった、あるいは同乗者は誰だったというのが、ザーッと書いてあるのを、みんなで焼いてしまった、わたしの留守中に。わたしはどんなことがあっても、自分の英語の学力で、けんかをしてでも死刑になっても、こいつと自分の階級章と家族の写真と、自分の軍服姿、飛行服姿を絶対持って帰るつもりで。

それから捕虜生活の時に訳した戦艦大和の最期、吉田満、あの方が戦後 20 何年あたりに書いたやつが、実は昭和 21 年の秋にシンガポールの新聞に載ったんです。われわれは大和が沈んだというのは知っていたけど、どんな沈み方をしたのか。わたしが英文を読んで、全部記録したんです。それを持って帰りました。それからわたしのおじの潜水艦を含めて戦艦武蔵、大和が、どこで敵の何に沈められたかということも正確に出ています。それも全部訳して持ってきました。潜水艦のおじの戦死広報は、19 年の 1 月 19 日ですが、これは潜水艦が消息を絶って燃料が尽きた日です。もう帰ってこられない。実は 18 年の 11 月 23 日、マキン、タラワの玉砕でタラワ島の沖でやられて、生存者が 4 人おると、これもここに記録。あそこに行って何をやったかという、日本で焼いてしまった記録があるものを全部調べることと、おじの最期は、できるだけ分かるように調べるといことです。

最後に日本の兵隊さんの遺品があった。アメリカへ 1 年行ってきたわたしの心を、今、休める最大のものは、沖縄の戦争で亡くなった兵隊さんの日の丸を取り返してきたことです。札幌に羽幌郵便局というところがあります。ここの渡辺政夫さんという方が沖縄へ招集された。あの時、祝出征とか武運長久とか、いろいろな人の寄せ書きしたものがありま

す。その郵便局ということだけは分かる。幼児の小さい手形が押してある。小さな子どもです。これをアメリカの学生が、自分の部屋で得々として見せていたのを、1週間かかってうまく取り入れた。「これは沖縄から帰ってきたおじさんに貰った」と言う。あのころソノシートというのがありました。郡上踊りのソノシートを1枚と筑前の竹人形、どれも100円ですが、結局彼にこの2つをやって、うまいこと取り上げて、「もう返せ」と言われなように、かばんの底に縫い付けてしまいました。そして早速、故郷の毎日新聞の記者に知らせました。わたしが出るときに切手代を130円くれて、「何かニュースでもあったら送ってくれ、捜してくれ」と言われました。ちょうど帰ったときが岐阜国体で、その郵便局の女の子が選手で来ていたもので、その子にわたしが手渡す場面を、毎日新聞が岐阜と北海道で同時報道する。「こんなことは嫌です」と、わたしは教育課長に言ったけど、「まあ、まあ、まあ国体だから青井君、君の性格は分かるけど、ここは目をつぶれ」と言っていました。

試験を受けるときの難しさは、内緒、内緒で、教育委員会も誰も知りませんでした。わたしの来てよろしいというのは、翌年、半年たって6月に来ましたが、その4月にすでにわたしは、教育委員会の指導主事に出ていました。その時、岐阜県の中学校英語科指導主事の第1号です。それまでは高等学校の指導主事しかなかった。やっと中学校の教師の中から指導主事が出た。30代の指導主事は1人でした。ただ中部工業大学ではありませんから。昭和42年岐阜県中退のペースです。あそこへ行くことになったのは、恩師の河合茂先生で英語学の大御所のお誘いです。

もう1つの理由とは。恩になって、給料も何もかも県は出してくれましたのに。教育次長が前の校長で、とてもわたしを気に入ってくれて、内緒でわたしの学校の教頭に、「青井君はどうも噂ではアメリカへ行くらしい、何とかやめさせるわけにはいかないか」と言ってきた。あのころフルブライトとか東西文化センターはいかに偉いことか、たいしたものかというのは、他の教科の先生なんかや、その辺の人には分かっていたかどうか知りません。われわれの間では大変なものです。何とかやめさせるわけにはいかないかと教頭に言ってきたんです。「おれがあいつに直接言うと、あれは義理を感じて、やめるかもしれない、嫌と言うかもしれない」と。教頭は、「駄目ですよ、先生、青井さんは退職しても行きますよ」。それで9月まで半年間、二等兵になったつもりで、必死に教育委員会で働きました。2倍仕事をしました。そしてあの時、中学校と小学校で文部省の学力試験がありました。その統計を、全部8月末までに文部省に送る。自分管下のその統計を、わたしは1人で任されまして、「これだけをやれば、おまえはもう一人前だから行ってこい」と、やっと言われた。「帰ってきたら猛烈に働いてもらうからな」と言って、給料も何もかも貰って、しかも後任の人を作らなかつたんです。

ところが2~3年後に中部大学に行った理由は、何とわたしは酒が飲めないということです。指導主事というのは半分役人です。その日に、岐阜県加茂郡白川町の奥の方へ行きますと、1時間に1本か2時間に1本しか出ない、山を登るバスに乗っていく。帰りに1日

お付き合いした学校の先生の所へ、役場から金が出るんです。つまり先生たちを慰労してやってくれ。その名目は県から役人、指導主事が来たから歓迎会を兼ねてやるんです。わたしはそういうものに出るたびに、主賓として酒を強いられて半死半生で帰ってきたんです。家内に「おれは60歳の定年までは命がないぞ」。教育委員会で「青井君、おまえは30代だ、まあ、おまえ、10年は教育委員会において、45ぐらいで校長に出るんだな」と、先輩の校長をやった経験の指導主事。これから、校長5分前の古参指導主事たちに、からかわれていました。もういいかげん嫌になっていました。これでは命がない。その2つの理由です。たわいないことです。酒が飲めたら、わたしはもっと素直な道を歩んででしょう。

でもあそこへ行って、今の中部大学の7学部で29教科、あれが始まる時に、わたしは事務長から、「君の骨は僕が拾ってやる」と言われた。最後に10年間、ある国立大学から、教育学部の英文科の主任教授10年の約束で、ということは55歳で10年だ、64歳が定年になる大学がこの近所にあるはず。皆さん想像がつくかもしれない。そこにイースト・ウエストに行っていたとき親しくなった、珠久さんよりちょっと年上の助教授から打診があった。その人たちと付き合っていた時に覚えられていたのでしょうか。2か月押さえていて、それをわたしは断りました。理事長（そのころの事務局長）が、君の骨は僕が拾ってやるよと、アメリカへ供をさせてくれ、姉妹校オハイオ大学へ何度も長期出張させてくれた。義理人情には弱いくせに、岐阜県には大きな不義理をした。

いよいよおかしい所へポコッと行き、機はあっちへ飛び、こっちへ飛び、人間、ここにやって来ました。

ところで、この日の丸を持ってきたことが、わたしは、アメリカへ行ったわたしの唯一の手柄だと思います。これがまず1つだけ。あそこの公文書館の中で、幼年クラブの新年号から終戦の年までの幼年クラブが全部そろっている。少年クラブも全部そろっている。ずーっとあって、昭和15~16年の2600年の、金のぴかぴかの表紙のこんな厚いやつから、スーッと薄くなって、10ページぐらいの哀れなやつ。それと岐阜県の県庁の職員や教職員の39年の名簿がちゃんとそろっている。

それと慰安婦問題がやかましくなっています。アメリカ軍は、あの降伏式前、マッカーサーが厚木飛行場に着陸した2~3日前に横浜へ上陸した。その時に神奈川県庁が、ある方面に出した第1の指令は何か。その道の1,000人の女性を用意せよ、これだったんです。こういう類のものが大分残っているんです。それがマッカーサーのGHQからの命令なんです。そして大阪府のあるそういう施設、いわゆる妓楼（ぎろう）が県知事に報告書を出した。9月20何日から1週間で、そこにいる女性が10何名で、何人の男を相手にしたかということが、何枚かのあれでカーボン紙に書き写す紙で、はんこをついたやつに書いてあります。1週間に10何名の女性が、何人相手にしたかが書いてあります。この内容は言わぬが花だと思います。話し出すときりが無い、

合図がありました。話はいくらでも引き出す。大概にいたします。このハワイ大学の時の面白さは、もうやる暇がありませんでした。こんなばかな話でよろしかったら、これで

終わりにします。

星野：はい、どうもありがとうございました。ご質問は何か。もう茶話会の方にすぐ入った方がよろしいですか。それとも今ここで、はい、どうぞ。

A：中部工業大学になっています。先生は中部大学。

青井：できましてから行って 2 年目に第 1 回の卒業生が出ました。だから中部工業大学と名前が変わっています。その前は工業短期大学でした。

A：そうです。中部工業大学から中部大学になります。

青井：それで今のようにすごく大きくなりました。

A：そうすると辞められたときは、もう中部工業大学ではなかった。

青井：中部大学でした。

A：中部大学。

青井：短期大学、それから国際関係学部と経営情報学部。それから思うと大変な発展。

A：昭和 2 年生まれと言われました。中部大学は定年までおられたんですか。

青井：はい、おりまして、それから 77 歳になって、またわたしに「おまえにポストを設けたから、もう一度出てこい」という電話がかかったんです。「冗談じゃありません。わたしは今喜寿ですよ、この喜寿の僕がこのこと中部大学に出ていったら、よその学校の手前悪いじゃないですか」と言ったんです。「いや、いや、君は、外見上まだたいして壊れていないから、車でやってこい」と言われました。80 までは勤めておりました。その時はれっきとした教授になった人とか下の人ばかりでして、知らない人たちもたくさんおりました。非常に力の弱い学生が最近入ってきます。英語の試験をやらないで、まあ無試験で入ってくるとか今年もやる英語 OA 方式何とかとあんなのもあります。しかし、入れた以上は責任を持たなければならんと思って、徹底的にまず英語からやっています。

例えばある生徒が、わたしは自衛隊に行きたい、しかし幹部候補生には行けないから、下士官で行くところに行きたいけれどもという者が来ました。英語は習ったけども、全然、アルファベットから分からないから教えてくれ。こういうのを面倒見てくれるのは青井先生に限る。要するに 77 になったやつは子守がいいと、孫ですね。わたしの主義は、1 時間目からあの先生のおかげで英語を好きになったと、自分がそうだったから、そんならいいよと、これを一生懸命やりましたら、自分で質問するようになってきた。

2 年間でだいたい中学校の 3 年生のところに行きました。自分が空いている時間に、ほとんど毎日来ました。非常に無骨な子で、OA で入ってきたんです。ところが 20 年患っていましたが、家内が亡くなりました。もう駄目だ。「明日も君、来いよ、そうして必ず受かるようにしてやるからな」と言って、彼に約束しておいて、わたしは家内の危篤に立ち会って、それからぷつぷつと。

わたしは、1 日でも 1 回でも休むということ、非常に罪悪が大きい。そういう先生が他科の先生に出てくると、昇任の時によその学部から横やりが入る。こういうだらしないやつがおるのに助教授とか教授とは何だということになって、上げてもらいたいのも上がらな

いです。先生方もご記憶があるでしょう。よその学部から評判が悪い学部は駄目です。だからそういうことで、みんながよく頑張っていました。その人たちが、そういう子をあやすのは青井先生がいいと、先生にうまいことあの辺にぶつけておこうと。支援センター長が、1日1時間でも休んでは、先生の信用が良くない、学部のためにみんなが良くない、他の人が迷惑するというのは、わたしの徹底した主義です。やかましく言われなかったけど、わたしは1日も休まなかった。わたしは、これでもう1日でも行かなかったら辞めると思っているから、20日ほど「うん」と言わなかった。まだやらせてもいいじゃないか。けどもう行かない。女房が亡くなった。ということで、とうとうずっと年下の自分が採用した主任が結局諦めました。そういう教師です。

星野：はい、では、どうもありがとうございました。

これで講演会を終わらせていただきます。